街談巷議

上海近況

(早稲田大学) 呉　念聖

昨年８月25日より，わたしは上海で12日間滞在した。１年半ぶりの里帰りであった。前回は父をなくしたため，今回は母をとむらうためだった。

この悲しいわたしを慰めてくれたのは上海の大きな変化だった。

１年半の間に，上海は実に大きく変わってきた。まずは，物が豊富でなんでも手に入るようになっている。上海人は，物価がまたあがったと文句をつけながらも，どんどん物を買っていく。淮海路にある伊勢丹に入ってみたら，確かにものは値段が高いが，買い物の人も多い。また，スーパーマーケットは市の中心部から周囲へと確実に数が増え，品物がきれいに置かれてお客さんを迎えている。日本と比べて，確かに店員が多すぎるが，しかしそれは監視モニターがないからしかたのない措置であろう。

家庭の食卓に魚料理がよく出され，あっちこっちエアコンの室外機が見え，多くの人の胸元をアクセサリーが飾っている。驚くことばかりであった。そんな中で，言葉の先生のもつ本能というもののせいか，わたしはことに言葉の変化に目を引かれていた。

中国語はレトリックを惜しまない言語である。文化大革命の時代，「偉大」，「最最」，「頂峰」のような賛辞があふれていた。文革後にも，その勢いは衰えず，例えば，新聞記事の報道対象に対し，ほとんど「著名」という形容詞を冠せずには気がすまない傾向はあった。しかし最近は修飾手法には大きな変化が見え，最高級形容法として反語が上海では大流行するようになっている。

例えば，本来「この品は最高だ」という意味を上海では今は「特格物事勿要塌好来」という。普通語に直訳すると「這東西不要太好了」となり，表現がちょっとおかしい。だが，実際の意味はちゃんと「這東西太好了」になっている。

最もおもしろい例は背広のテレビコマーシャルに流れる「不要太瀟洒」というナレーションである。字面の意味は「かっこう良すぎて駄目だよ」であるが，今の現地の人の共通理解では「それ以上かっこう良いものはありません」である。ただ，上海人はこの言葉が普通語でいわれることに物足りなさを感じている。本当は上海語の「勿要塌瀟洒」のほうがずっと味が出るという。

香港の上海における影響は，広東には及ばないが，やはり大きい。広東語の歌，香港歌手のしゃべり方，動き方，とりわけ，芸能界には香港スタイルが脅威的に増長している。

芸能用語ではないが，実は携帯電話の異名「大哥達」も香港からの輸入品である。聞くところによると，「大哥」は香港では「ヤクザ親分」の意味で「達」は「偉い」の意味で，そもそも携帯電話はそのような偉いヤクザ親分が使っていたものだ。しかし，上海人はそれにとどまらず，それに性能がすこし劣る携帯電話をなんと「二哥達」と名付けた。

ついでに紹介すると，ポケットベルを「ＢＢ机」という。最初はわたしは些か自分の耳を疑っていた。英語の頭文字を取って名付けるなら「ＰＢ机」となるはずなのに。実はそれは単にビービーという音からきた擬声語式の新語である。

改革解放政策のもと，上海人はよく中国のことを外国と比較する。比較して，まあまあ同程度になっている，つまり国際常識からあまりはずれていない状態を「接軌」（レールを接ぐ）といって

いる。その言葉から，伝統的な中華思想にかわって国際視点が樹立しつつある実態がうかがえる。

去年帰ったときと比べて，上海のタクシーは数多くなり，運転手の顔ぶれも多様になった。おのぼりさんのような「大嫂」（おばさん）もいる。個人タクシー業は上海周辺の農民の出稼ぎ手段の一つであるといわれている。そして，現在，運転手が一番好きなお客は国内の人だそうである。それに香港人か台湾人。こうしたお客さんは大概おつりは取らないからである。タクシーに乗れる身分ならおつりぐらいは気にしないはずだと中国の運転手は考えている。

嫌われるのは日本人，お金をいっぱい持っているくせにおつりをもらうなんて，なんとけちな金持ち（野郎？）だと。そしてアメリカ人はそれ以上嫌われている。おつりは要求するし，乗る際，いくらかかりますかとまで聞くから。

今は上海の人は，けっこう国外の人を，台湾人や香港人も含めて批評したりする。わたしのある友人は市政府の幹部で，日本の役人を何回も招待したことがある。彼の経験では日本人は酒をすすめられると素直に飲み，簡単に崩れる。やや軽蔑した話ぶりは，酒に弱い人が中国人の目には小人に映るためではなかったかと思われる。

大陸に多くの台湾人が旅行にやってくる。中にはマナーの悪い者もいる。そんな人を，上海人は「痞子」と呼び，教養のない兵隊出身だと決めつける。

昔と違って，今の国外人への品定めはイデオロギーによるものではなく，ほとんどが自分自身の観察か経験によって徐々に得たものである。よく聞いてみれば，要を得たものも少なくないと思う。

生活が良くなり，外部と接触が多くなるにつれて，問題も当然増える。大消費ブームに対し労働意欲の不足が大問題だと思う。次のような言葉がその一端を表している，

「厰長搞横向，工人白相相，做生活靠阿郷」。

つまり，工場長は外ばかりに目を向け本業以外の収益を得ようとし，労働者は働かず遊び，生産は出稼ぎ農民に頼りきる。

また，幹部の堕落が多く，もっとも警戒されている。今回はこのような戒めの言葉を聞いた，

「袋袋勿要模錯，枕頭勿要睏錯，方向勿要跟錯」。訳せば，「財布を間違えるな，枕を間違えるな，方向を間違えるな」という意味である。

上海人の平均月収はすでに五百元に達しているそうだが，決して贅沢できるお金ではない。個人経営者なら財布はまだ自由になるが，サラリーマンの場合，使えるのはせいぜい接待費ぐらい。ちょっと間違えて会社や国のお金を流用したら，汚職になる。そこで，お金なら必ず自分のポケットから，ほかのポケットからは駄目だよというので「財布を間違えるな」。

解放初期，社会がかなり浄化され，みなは共産党はすごいと讃えていた。しかし今は風紀が乱れ，しかも取り締まっても効かない。「枕を間違えるな」とは「かってに枕を交わすな」という女性問題を戒めている語。今はその分野は死語が一部よみがえり，新語も生れてくる。例えば，北京語の中，次の動詞が流行っている，

「溴蜜」　：蜜を嗅ぐという意だが，実は女を探すこと。

「泡妞」　：女のところに潰かる，入りびたって遊ぶこと。.

「傍大款」：金持ちによりかかる，パトロンを見つけること。

（1993.8.30上海《新民晩報》籥復興『動詞新釈』を参照。）

しかしながら，中国はやはり社会主義国家。金銭問題，女性問題よりも政治問題が遥かに重要で，実に神経をとがらせる問題である。「方向を間違えるな」，政治方向や政治路線にかかわる問題で一歩間違えたらもう一生うだつがあがらない。そういう意味で中国はやはり中国だ。